

## 島根あさひ社会復帰促進センター見学記



2024年10月1日、島根あさひ社会復帰促進センター（以下「センター」という）を見学した。

### 1 センター概況

センターは、浜田自動車道を挟んで、刑事施設エリアと地域交流エリアとがあり、地域交流エリアには認定こども園、盲導犬訓練センターなどがある。

センターは、2001年頃の刑務所過剰収容を受け、総合規制改革会議で民間介入が議論され、2008年にPFI（Private Finance Initiative）方式で運営を開始した。なお、2026年3月末にPFI方式は終了予定である。

センターは、国と民間で組織され、官民共同運営、地域との共生、人材の再生、受刑者の再犯防止を掲げている。国の職員は185人、民間は337人である。

受刑者（センターでは訓練生と呼ばれる）は定員が2000人で、現在は825人程度（収容率40%程度）を収容している。

収容対象者は、犯罪傾向が進んでいない男子受刑者（A、YA）と、特化ユニットで身体障害者など特別なケアを必要とする者も一部収容している。

受刑者の平均年齢は、35.4歳と若く、収容期間は平均3年5ヶ月、最長8年、最短10ヶ月である。収容罪名の上位3つは、窃盗が35.2%、詐欺が24.9%、強制性交が5.9%である。覚せい剤事犯が入っていないのが特徴的である。93%が仮釈放となり、執行刑期は82%である。

### 2 センターでの処遇や作業

修復的司法、TC（Therapeutic Community、回復（治療）共同体）と認知行動療法を教育プログラムに活用しているということであった。

修復的司法は全てのプログラムで意識され、TCについては、

刑事法対策特別委員会委員長 神谷 竜光（67期）

映画「プリズン・サークル」でも紹介されている。このほか、動物介在プログラムや、地域の人との文通もなされている。

センターでの作業・処遇として特徴的なものは、点字翻訳や山森育成課、GPSを使った施設外作業もある。

### 3 センターの施設見学

収容棟は、ループ上の廊下を囲うように配置されており、部屋は個室で、窓に格子はない。センターの周囲には塀がなくフェンスであるため、開放的に外が見えるようになっていた。

訓練生の購入したい物品については、指紋認証によるキオスク端末でもって購入ができるようになっている。

収容棟での食事は、ホールで行えるようになっており、開放的であった。ただ、席は場所が決まっており、会話は余暇時間でないと禁止されているとのことであった。

訓練生は、衣服にICタグが装着され、これにより、職員同行なく、独歩で移動できるようになっている。

作業としては、金属塗装、ハンガー組み立て、木工、果物のピーリングなどを見学した。

保護室の収容は見学当日は0人で、保護室の窓からは外が見えるようになっていた。

### 4 質疑応答の一部

訓練生の呼称に「さん」をつけることは、昨年度から訓練生がいない場所でもそのように呼ぶようになり、職員間でも普及しているという。

センターでは訓練生の位置情報の把握にICタグやGPSが活用されているが、運営開始後、逃亡事故はない。

PFIは、2026年3月末で切れることになるが、公共サービス法に基づき、連続性をもって今後も継続する予定であるとのことだった。なお、その場合でも、巡回については、民間職員から国の職員に変わるとのことであった。

### 5 さいごに

センターでの処遇は世界にも誇れるものであることがセンター長からは語られた。他の日本の刑務所にもこのような処遇の在り方が広がることを願い、見学を終えた。